

ところざわ倶楽部  
文芸・歴史講座

<第2回>

「木曾義仲

— その栄光と挫折 —」

2022・7・8 (金)

14:30~16:30

新所沢公民館ホール

竹内好夫

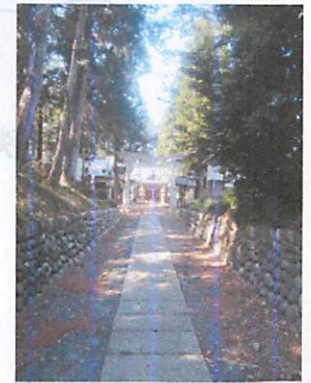


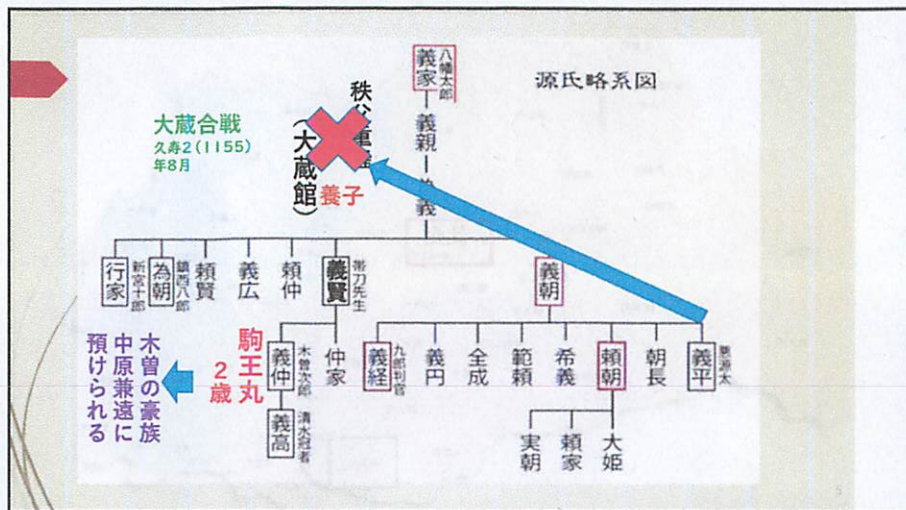
← 「木曾義仲産湯清水」の碑がある鎌形八幡神社。今も清水が滾々と湧き出ている



「比企の乱」(1,203)の48年前、武蔵国比企郡大蔵では、源氏内部の同族争いがあった。  
「大蔵合戦」(1,155)である。

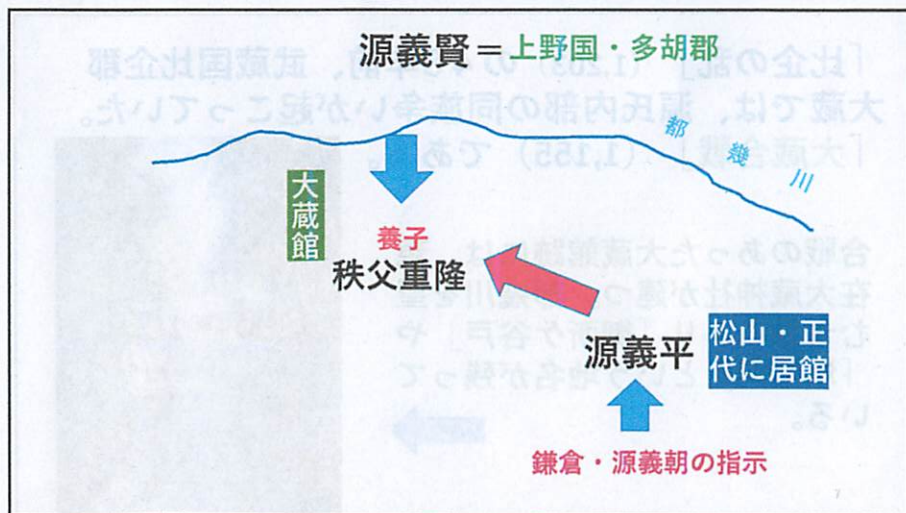
合戦のあった大蔵館跡には、現在大蔵神社が建つ。都幾川を望む台地にあり「御所ヶ谷戸」や「堀之内」という地名が残っている。





## 大蔵合戦 1155年(久寿2)8月16日

源義朝の長男・悪源太義平が、義朝の弟・源義賢と、義賢を養子に迎えていた秩父重隆を攻め滅ぼす。その戦いの舞台になった秩父重隆の屋敷が「大蔵館」だったことから、この事変を「大蔵合戦」と言う。この合戦で義平は源義賢の遺児・駒王丸(2歳)の殺害を畠山重能に指示し、重能は斎藤実盛に委ねる。実盛は、これを殺すに忍びなく、木曾の豪族・中原兼遠(乳母父)に託す。中原兼遠は、駒王丸を木曾源氏の頭領にするべく木曾で育てる。



延慶本『平家物語』

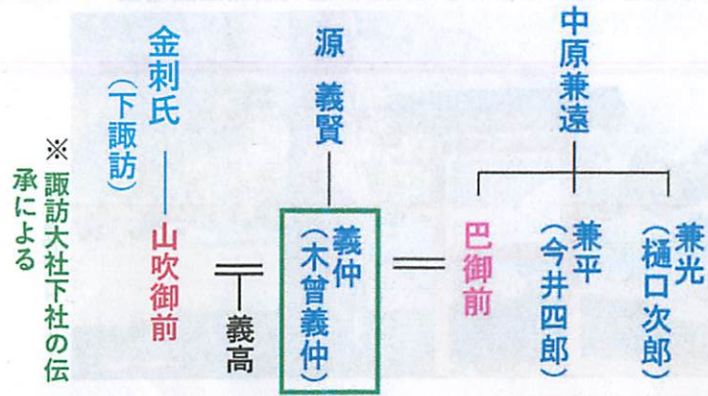
あの は、去る 彼義賢、去 仁平三年の夏ごろより、上野 国多胡郡に居住したりけるが、秩父次郎 の養子 大夫重隆が養君になりて、武蔵国比企郡へ 通ひけるほどに、当国に限らず、隣国まで 国支配していた

八月十六日、故左馬頭義朝が一男悪源太義平が為に、大蔵の館にて義賢・重隆共に討たれけり、

源義朝の長男

群馬県

## 木曾にて・・・



## ～ひとくちメモ～

駒王丸の命を助けた斎藤実盛については、あとで触れますので、記憶にとどめておいてください。

### 「妻沼の聖天山」(熊谷市)

斎藤実盛が、守り本尊の大聖歓喜天(聖天)を祀る聖天宮を建立し、長井庄の総鎮守としたのが始まりとされている。



### 『吾妻鏡』治承4年9月7日条

「乳母の夫である中三権守(ちゅうさんごんのかみ=中原家の三男で、権守の兼遠)は、義仲を抱いて信濃国の木曾に逃れ、義仲を育てた。成人した今では、武勇の素質を受け継ぎ、平氏を討って家を興そうと考えていた。そこで、前武衛(=頼朝)が石橋山で既に合戦を始めたことと耳にし、すぐに拳兵に加わり念願の意志を示そうとした。」

中原兼遠を頼って木曾に逃れて来た駒王丸(義仲)は、「力は人に優れて強く、心も並びなく剛の者」に成長した。文武両道を教え、義仲の旗拳を楽しみに育てた兼遠は佐久の根井行親の一族など信濃国中の豪族と組んで地盤を固め、我が子を従者につけ義仲のうしろ楯となった。

兼遠の子らは、義仲と乳母子の間柄で幼いころから一緒に生活し、義仲の拳兵とともに忠実な郎党として様々な合戦に参加して目ざましい働きをしている。

### 木曾義仲の拳兵

治承4年(1180)、以仁王(後白河上皇の次男)の平家追討の令旨に従い、27歳で木曾谷の宮ノ越に反平家の旗揚げをする。

旗拳八幡宮は木曾川沿いの長野県日義村の村域にある。村名は後の呼称「朝日將軍木曾義仲」の「日」と「義」をとってつけられた。





倶利伽羅峠の合戦・エピソード①『平家物語』、能「木曾」

倶利伽羅峠の戦いの開戦直前の話。平家を迎え撃つ木曾義仲は山中で平家軍を倶利伽羅谷に追い落とす作戦を立てる。自陣付近に入幡宮を見つけた義仲は参謀の覚明に命じて戦勝祈願の願書を奉納させる。すると山鳩が飛んできて軍旗の上を飛び回り、神の加護を確信した。

### 俱利伽羅峠の合戦

1183.4



(現地案内板より)

### 木曾「願書」

身命を捧げ神に礼拝します。八幡大菩薩は、日本国朝廷の主上、歴代名君の先祖であらせられます。皇位を守り、民衆を利するために、金色のお姿を現わし、八幡の御祭神の扉を押し開き、この世にお出ましなさいました。ここに近年、平相国(平清盛)という者があり、天下を支配し、万民を苦しめております。これは仏法の仇、王法の敵であります。私の曾祖父の源義家は鎮守府將軍で、八幡宮の末孫です。私義仲はその後胤としてここに平家討伐を決心しました。それを例えて幼児が貝殻で大海を量るようなもの、カマキリが斧を構えて戦車に挑むようなものだとしても、天皇や国のために決起するものであります。私の願いをご納受されますよう必勝を祈願します。どうか神のご加護により、敵を四方に退けてください。

寿永二年五月十一日

能(謡曲)の世界では「安宅」の「勧進帳」、「正尊」の「起請文」、「木曾」の「願書」を三読物と呼び特別の扱いがなされる。

### 栗津の松原



### 篠原の合戦

1183.6

### エピソード②

駒王丸(2歳の義仲)の命を救った斎藤実盛とは、何者なのか?



妻沼聖天山の実盛公像

『平家物語』、能「実盛」

駒王丸（2歳）の命を救った人物は・・・

## 齋藤別当実盛公伝

さねもり

（妻沼聖天山HPより）

① 越前国、南井郷（なおいごう）の河合則盛の子（幼名：助房）として、生まれる。十三歳の時、長井庄庄司 齋藤実直の養子として長井庄に居住、名を実盛とする。祖父の実遠以来、源氏との主従関係を結ぶ。武蔵武士として、数々の戦いで功を挙げた。

## 一一五五年（久寿2年）大蔵館の変

② 鎌倉に住む源氏の棟領義朝と、大蔵館に居住する義賢（義朝の弟）は、武蔵国をめぐって対立。義賢は義朝の息子義平に討ち取られるが、遺児駒王丸を実盛公がかくまい、後に信州の豪族に養育を依頼する。

②（続）平治の乱で平氏に敗れ、長井庄に帰る。長井庄は平氏の領地となるが、これまでの実盛の功績が認められ宗盛より引続き別当としての職務を任される。

③ 実盛公は、戦死した武士の供養と領内の平和と繁栄を祈願して、治承三年（一一七九）に自ら守本尊である「大聖歓喜天」を古社に祀り聖天堂と称し、長井庄の総鎮守とする。一一八〇年、源頼朝が挙兵し、再び源平による戦乱の時代となる。実盛公は平宗盛の恩に報いるため、平氏として戦うことを決意。敵となった源氏方の、かつて命を助けた木曾冠者義仲（駒王丸）と戦うことになる。



① 妻沼聖天山



② 歓喜院（聖天山内）



鏡を持ち髪を染める実盛

## 〈妻沼聖天山HP・続き〉

### 平家物語より

平家軍は、義仲追討のため実盛公の生まれ故郷の北陸に向かう。

篠原（石川県加賀市）は実盛公の一族同門の地である。故郷に錦を飾るとい言葉に従い、宗盛からいただいた大将用の赤地錦の直垂を着て、年老いた武士とあなどられないよう白髪を墨で黒く染め、篠原へ出陣した。

一一八三年（寿永2年5月21日）篠原の戦い

木曾義仲の軍の勢いに押され、敗走していく平氏の兵の中、最後尾でただ一騎ふみとどまり防戦するが、義仲軍の手塚太郎と戦いとなり壮烈な討死をする。享年七十三歳。実盛公は最後まで名を名乗らなかった。

大将らしき姿で名を名乗らない武者が、白髪を染めた実盛公であったことに気が付いた義仲は、命の恩人の無惨な最後に泣き崩れたという。この壮烈な戦の悲劇は、後に「平家物語」・「源平盛衰記」・歌舞伎「実盛物語」・謡曲「実盛」など、数多く語り継がれている。

左上義仲像の拡大写真↓



↑ 実盛を偲ぶ義仲主従



← 実盛首洗い池



「むぎんやな甲の下の  
きりぎりす」(芭蕉)

小松市・多太神社



① 寿永二年七月二十八日、義仲は六万の軍勢を率いてついに京に入った。木曾谷に挙兵して以来わずかに三年——義仲は頼朝に先立ち、ついに宿願の上洛を果たしたのである。しかし、この時すでに勝利に酔う義仲の兵士たちの略奪暴行が始まっていた。

② 義仲軍の略奪暴行に悩む都の貴族たちの間で、一方、鎌倉の頼朝の人気は日に日に高まっていった。

③ 一方——義仲の上洛に先立って都落ちした平家は、九州から四国の屋島に移って、再び勢力を盛り返しつつあった。すでに瀬戸内海の制海権を押さえ、さらにその勢いで山陽道から、京都への接近を目指していた。寿永二年九月、義仲は後白河法皇の命を受け、平家討伐のため心ならずも都をあとにした。

④ 西の平家に加えて、東の頼朝、今や義仲は腹背に敵を受ける身になった。十月十五日、京に帰った義仲は、直ちに法皇と天皇を幽閉し、みずから武門最高の栄誉である征夷大將軍となった。しかし、その十日後には——頼朝の命を受けた範頼と義経の大軍が、宇治川と琵琶湖畔瀬田の両方面から義仲を討つべく、急速度に京都に迫って来たのである。

⑤ 琵琶湖畔に落ちのびた時、大将義仲に従う者は今井兼平ただの一騎であった。湖岸伝いに粟津の松原へと急ぐうち、泥田に馬の脚をとられ、どっと倒れるところを遠矢に、内兜を深く射られて討たれたという。宿願の上洛を果たしてのち、わずかに半年——朝日將軍木曾義仲の生涯は終わったのである。



木曾義仲のその日の装束は、赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧を着て、鍬形を打った甲の緒を締め、いかめしい大太刀を帯び、石打ちの矢の、その日の戦いで射て少々残ったのを頭高に背負い、滋藤の弓を持って、名高い木曾の鬼草毛という馬で、極めて太くたくましいものに、縁を金で飾った鞍を置いて乗っていた。鎧を踏んぱり立ち上がり、大音声を上げて名乗ったことは、ものを、木曾の冠者、今は見るであろう。左馬頭兼伊予守、朝日將軍、源義仲であるぞ。甲斐の一条次郎だな。互いによい敵だ。義仲を討って源頼朝に見せろや」といつて喚いて突撃する。(中略) 木曾の汚余騎は、六千余騎の中を、縦横、横横、蜘蛛、五十文字に駆け破って、背後へつと出たところ、五十騎ばかりになっていた。そこを討ち破って行くと、土肥二郎実平が二千余騎で行く手を阻んだ。さらに突撃して行く間に、あそこでは四、五百騎、ここでは二、三百騎、百四、五十騎と、駆け破り駆け破りして行くうちに、主従五騎になってしまった。五騎の内まで巴は討たれなかった。

木曾殿は、「お前は女であるから、どこへでも行け。私は討死する覚悟だ。もし人手にかかったら、自害をするつもりだから、その時に木曾殿が最後の戦に女を連れていたなどと言われることもふさわしくない」とおっしゃったけれども、なおも落ちて行かなかったが、何度も言われて、「ああ、よい敵が欲しい。最後の戦いをしてお見せ申したい」と思っているところに、武蔵国で評判の力持ち、御田の八郎師重が三十騎ほどで現れた。巴はその中に駆け入り、御田の八郎と馬を並べて、むずと組んで引き落とし、鞍の前輪に押し付けて、少しも身動きさせず、首をねじ斬って捨ててしまった。その後、鎧、甲を脱ぎ捨て、東国の方へ落ちて行った。

### 鑑賞『平家物語』「木曾・兼平の最期」(要約)

とうとう、今井四郎と木曾殿の主従二騎になってしまった。

**義仲**「日頃は何とも思わぬ鎧が、今日は重く感じられるぞ」。

**今井**「御身はまだお疲れになつていらつしやいませ。御馬も弱つておりません。何が原因で一領の甲冑を重くお感じになるのでしよう。それは味方に軍勢がおりませんので、臆病でそうお思いになるのです。兼平がお側におりますことを、他の武者千騎とお思いくだされ。矢が七、八本、残つておりますので、しばらく防ぎ矢をいたします。あそこに見えますのは、粟津の松原です。あの松の中でご自害なさいませ」

**今井**「殿はあの松原へお入りください。兼平はこの敵を防ぎますから」

**義仲**「私は都で死ぬところであつたが、ここまで逃れて来たのは、お前と同じ所で死のうと思つたためだ。別々の場所で討たれるよりも、同じ所で討死しよう」

**今井**「武士は、どのような功名がございしても、最期の時にに不覚を取れば、長い疵となります。御身は疲れにいらつしやいます。後続の軍勢はございません。敵に押し隔てられ、つまらない郎等に組み落とされなさつて、お討たれになつたならば、日本国中に評判だった木曾殿を、名の知れぬ者の郎等が討つたなどと申されることは悔しいございます。さ、あの松原へ。」

**義仲**「では、さらばだ！」

**今井**「日ごろは話にも聞いていよう、木曾殿の乳母子、今井四郎兼平だ。鎌倉殿もご存知であろう。兼平を討つてご覧に入れよ。」

義仲は松原に向かう途中で薄氷の張った深田に馬の脚を取られ、振り返つた瞬間、敵矢に射止められた。

**今井**「今は誰をかばうために戦をするべきか。東国の方々、ご覧なさい、日本一の剛の者の死の手本！」

今井四郎は太刀の先を口に含み、馬から逆さまに飛び落ちて、貫かれて死んでしまった。こうして粟津の戦は終わりを告げたのだった。

## 願書 (「木曾」)

南無歸命頂礼八幡大菩薩は。日域朝廷の本主。累世明君の曩祖なたり。宝祚を守らんが為。蒼生を利せんが為に。三身の。金容を顯して。三所の権扉を。押し開き給へり。ここに頻の年よりこのかた。平相国と。いふ者あつて。四海を掌にし。万民を悩乱せしむ。これ仏法の仇。王法の敵なり抑も。曾祖父前の陸奥の守。名を宗廟の。氏族に帰附す。義仲苟も。その後胤として。この大功を起こす事。喩へば嬰兒の蠱を以て巨海を測り。蠟螂が斧を取つて。隆車に向かふ如くなり。然れども君の為国の為にこれを起こすのみなり。伏して願はくは。神明納受垂れ給ひ。勝つことを究めつつ。仇を四方に退け給へ。寿永二年五月日と。高らかに読み上げたり。

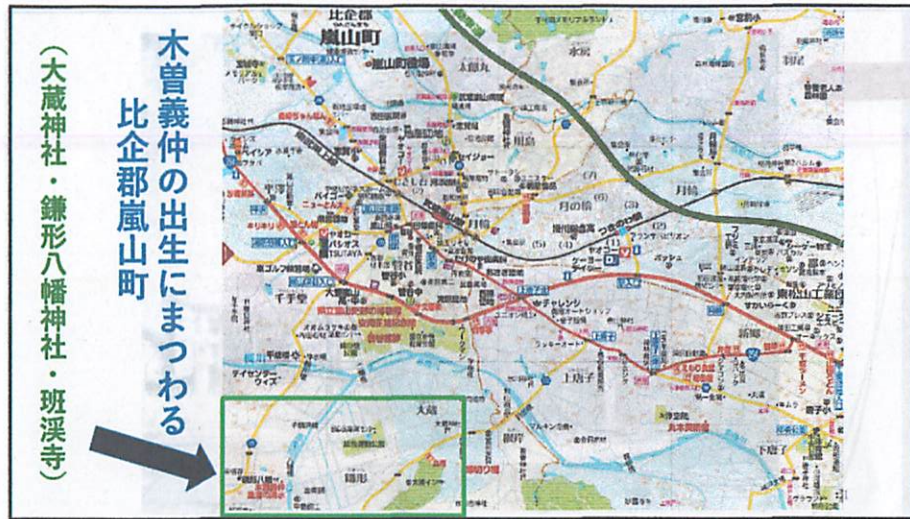
木曾義仲が部下の覚明に書かせて、殖生八幡宮に奉納した必勝祈願の願書。

「身命を捧げ神に礼拝します。八幡大菩薩は、日本国朝廷の主上、歴代名君の先祖であらせられます。皇位を守り、民衆を利するために、金色のお姿を現わし、八幡の御祭神の扉を押し開き、この世にお出ましなさいました。

ここに近年、平相国(平清盛)という者があり、天下を支配し、万民を苦しめております。これは仏法の仇、王法の敵であります。

私の曾祖父の義家は鎮守府將軍で、八幡宮の末孫です。私義仲はその後胤としてここに平家討伐を決心しました。それを例えて幼児が貝殻で大海を計量するようなもの、カマキリが斧を構えて戦車に挑むようなものだとしても、天皇や国のために決起するものであります。

私の願いをご納受されますよう必勝を祈願します。どうか神のご加護により、敵を四方に退けてください。





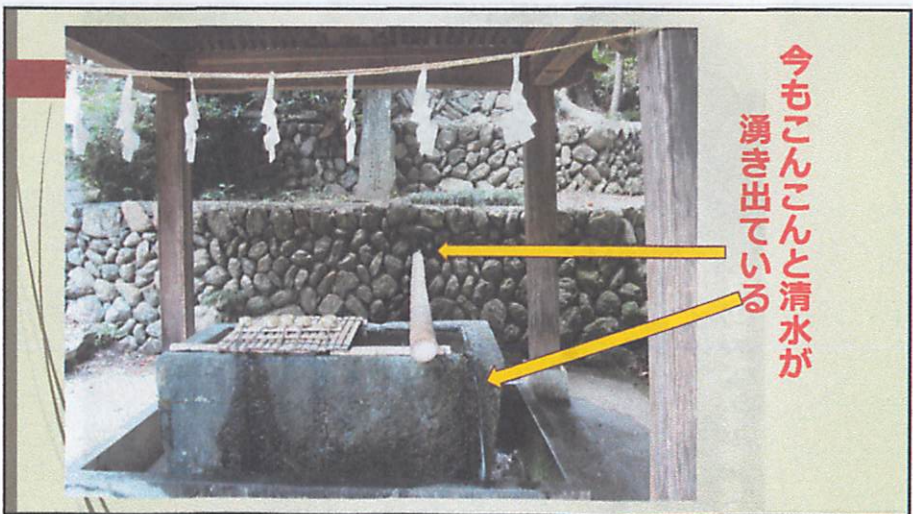
大蔵館跡 (大蔵神社)



26



鎌形八幡 (木曾義仲産湯の清水)



今もこんこんと清水が湧き出ている

## 班溪寺

源平の合戦で活躍した武将、木曾義仲の妻・山吹姫によって創建されたと伝わる寺。

山吹は、巴と共に義仲軍に従軍していた。

義仲の息子・義高の母親と言われ、11歳で非業の死を遂げた義高の菩提を弔うためにこの寺を創建したと言われている（寺の梵鐘の銘による）。

源義高は寿永2年(1183)和睦のため、頼朝の長女大姫と婚約、鎌倉に入る。翌年父が討たれ、自分も殺害されることを知り鎌倉を脱出したが、武蔵国入間川原で元暦元年4月26日殺された。通称「清水冠者」。

29



30



31



木曾義仲の妻山吹姫の墓とされる五輪塔（嵐山・班溪寺）

32

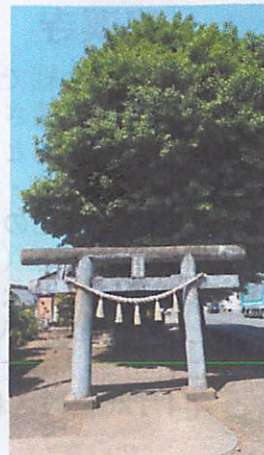


影隠地蔵



33

木曾義仲の嫡男・義高は狭山市の国道16号沿いに祀られている



長野県上伊那郡  
辰野町に建つ



樋口次郎兼光の墓



今井四郎兼平の墓

JR石山駅の北西、盛越川のほとりに建つ

35



木曾義仲の墓  
(滋賀県大津市・義仲寺)



巴御前供養塔 (義仲寺)



松尾芭蕉の墓 (義仲寺)



木曾殿と  
背中合わせの  
寒さかな  
又玄

36